市長とドンドン語ろう！学校教育版（議事録）

◎市長挨拶

新型コロナウイルスの感染が拡大していく中で、特に、学校現場、子どもたちを取り巻く環境が大きく変わっていった。

今回は、学校現場の先生から、実際にコロナ禍で教育活動を行っていくうえで、困難をどのように改善して乗り越えてきたのか、教育 ICT のツールを整備してきたが、これからさらに活用していくにはどうしたらいいかなどについて、先生たちの生の声をお聴きしたい。

ICT や教育現場をよりよくしたいと思い、教育長とともにこの「ドンドン語ろう！」を企画した。

◎市長から

熊本地震が起きたことで、授業自体ができなくなった。これを乗り越えるためにリモート環境、特に教育 ICT 環境整備は重要だと感じた。

熊本市の教育 ICT 環境は政令市の中でワーストレベル、平成 30 年度は 20 市中 19 位であったが、政令市のトップレベルを目標に環境整備を行うとともに、タブレットを配備することを目的化するのではなく、深い学びや深い思考、学びの質・教え方の手法も変えるツールとして、学びのトップレベルにしていく気持ちで進めてほしいと教育長にお願いした。

未来への投資を短期間で進めるのは財政的にも大変なことであり、一気に 30～40 億円の経費を教育だけに投資するのは難しかったが、復興の担い手・未来の熊本を創るためには、今、頑張って、子どもたちにいい環境で学んでもらうことが重要ということで教育への投資を増やしてきた。現在、本市は全国からも注目されるような教育 ICT の先進都市となっており、これは先生方のおかげだと思っている。タブレット端末の整備が今年の 4 月までに 3 人に 1 台の体制が整っており、今年度中には 1 人 1 台の配備が実現する予定。電子黒板や実物投影装置といった機材も揃え、一気に 40 億円以上の投資を行った。

学校のエアコンについても、財政的に厳しいとの話もあったが、先生だけでなく、子どもたちの環境を考えて、エアコンの整備を進めた。その結果、一昨年、全国的な猛暑であったが、本市では学校教育に関しあまり困ることはなかった。

それと同時に学校現場や教育センターで研修等を行うＩＣＴ支援員の配置もきちんと行ってきた。

また、産学官の連携としては、教育情報化の推進ということで協定を結び、いい教育環境を作る様々な取り組みを行ってきた。

GIGA スクールは国も進めており、本市は早めに踏み出して、今年度総事業費 57 億円の予算措置をした。本日参加されている先生方は 1 人 1 台になったらこう活用しようというイメージもされていると思う。

来年３月までには、必由館・千原台高校、平成さくら支援学校にも１人１台端末を整備予定である。コロナ禍で、国からの予算補助があり、整備できたというのが今までの経緯。

では今から、ＩＣＴを活用した教育のこれからのことを議論したい。まずは、２校から事例発表をしていただき、学校現場での教育環境をどのようにしていくかということの意見交換を行っていきたい。

◎事例発表

■楠小

楠小での休校中のオンライン授業の実践報告をする。「私たちの生活と政治」という単元での実践。休校中の学びとしては、ピンチはチャンス！時間がたくさんあるからこそ、探究的で創造的な学びをしていこうと子どもたちへ伝え、私も自立した学習者にしていきたいとの狙いをもって実践した。政治はどこか遠い場所の話になっているので、少しでも子どもたちが自分のこととして捉えることができればいいと思い、子どもたちには市長になりきって市長フリップを作り、熊本市にエールを送ろうという課題を立てた。実際に作ったフリップには、桜を入れたり、手洗い・うがいを取り入れたりしていた。今回の学習で、確実に政治を自分の身近なこととして捉えることができた。

オンライン授業においては、日頃から授業改善をしなければならないと心がけており、気を付けているのは子どものアウトプットと授業の軸を子どもにすること。「教える」から「子どもたちが学び取る」という熊本市が目指すスタイルがあり、タブレットが導入されたことでその子にあった学び、学びの個別最適化ができることを実感した。

日頃の授業の取組を紹介すると、「社会カルタを作ろう」という学習を行った。読み札をスケッチし、五七五で読み札を作るというもので、子どもたちが得た知識を再構築して、自発的に教科書・資料等を読み込み、情報を精査しながら五七五にまとめる。１人１台になれば、ある子は NHK for school などで必要な情報を必要なときに見る、ある子は書き始めるなど、自分のタイミングで学びを進めることができるようになった。授業以外でも、家にいる子と学校にいる子がいっしょに活動できたり、休校後の新しい生活スタイルにおいても、オンラインで代表委員会・児童集会や終業式を行ったり、密になることなく全体的な活動ができた。

次に、学校全体の取組について発表を行う。これまでの実践から、新時代の学びに向けて必要なことが３つ見えてきた。１つ目は、１人１台タブレットの実現であり、現在は予約表を管理して保管場所まで取りに行っているが、１人１台の実現により、予約や取りに行く手間が省け、必要なときにいつでも使える。子どもたちの成果物や必要な情報をタブレットに保存できるので、学習がとぎれず継続的に可能となる。また、家庭学習での活用の広がり、その子にもあった学びも可能となる。２つ目は、教員のスキルアップであり、放課後や職員会議後に少しの時間で研修を行ったり、実践動画を共有している。これはスキルアップを図るだけでなく、やってみよう・できそうという気持ちの面でもハードルを下げて誰でも広く

活用できるように取り組んでいる。3 つ目は、保護者との連携・協力であり、オンライン授業では家庭での学習環境を整えたり、学習の様子についてコメントをもらうなど家庭の協力が大きかった。今後、1 人 1 台が実現することで、タブレットを家庭に持ち帰り自主学習に使うなど活用の場が広がると思う。保護者との連携・協力を図るためにも、学校での活動の様子や使い方などについて積極的に発信すると同時に、保護者の意見を聞いていくことが大切。9 月にオンライン授業参観や学級懇談会を計画しているので、保護者の理解や協力が必要になると考えている。1 人 1 台が実現するとともに更なる教員のスキルアップを推進し、保護者との連携を進めていくことで、学びの選択肢が増え、可能性が広がると考えている。

■桜木小

校内研究での取組を中心に実践を紹介する。ICT を一つの手段として活用しながら教科の本質を大事にした授業づくりを行ってきた。昨年度は、ものの見方・考え方を広げ、深める授業づくりという研究視点を基に、それぞれの学年で様々な授業実践に取り組んできた。

研究の視点としては、2 つの視点から取り組んでおり、視点 1 として、児童が目的意識をもって取り組むために、学習展開・単元計画の工夫、問いの工夫を行ってきた。これは 5 年生の国語科の授業の実践であり、1 時間ごとの学習活動が単発で、繋がりのないものとなることがあり、子どもたちは見通しが持てずに学習を進めていくことになっていた。ここで単元全体を通しての学習設定が重要になる。単元導入時に、児童とともに学習計画を作ることで、児童にとって必要感のある課題設定を行った。この授業では、和の文化について学ぶだけではなく、和の文化の魅力を伝えるプレゼン大会を行い、ALT（外国語指導助手）の先生に伝える、というゴールを設定した。こうすることで、児童は明確に目的意識・相手意識を持って学習を進めることができた。実際の授業では、このような流れで単元を進めた。

2 年生の算数の実践では、導入時に児童の日常的な場面を設定し、子どもとともに考えることで目当てを引き出した。電子黒板にイラストを交えて場面を提示しながら、児童には買えるか買えないなどロイロノートのカードで自分の立場を示させた。思考のずれを可視化することで、考えたい・伝えたいという思いを引き出すことができ、明確な根拠を基に、答えを求める学習に入っていくことができた。また、児童が自分の学び方を振り返るために、学びを自覚する振り返りの工夫を行った。毎時間、視点を明確にしながら振り返りを行うことで、自分たちの見方や考え方がどのように変わったのか、自覚を促すことができた。継続的な振り返りによって、単元のゴールを意識しながら学びを繋げていくことができた。振り返りを書いて終わりではなく、授業の導入時に振り返りを活用することで、一時間ごとの授業の繋がりを意識しながら学びを進めることもできた。また自ら自覚する振り返りの工夫を行った。更にロイロノートを活用することで自分が学んだ情報を蓄積するとともに、他の児童の振り返りも共有することができた。その中で、高学年では日常的にキーボードを使用し、ホームポジションを意識しながら文字を入力させ、情報機器の基本的な操作を習得させ

るようにした。

次に、教師の授業コーディネートの工夫、児童の対話的な学びを生み出すために、教師の関わり方の工夫やそのための ICT 活用の工夫について考えた。まず教師の関わり方の工夫として、つぶやきや意見、考えを取り上げること、また、他者との考え・違いに気づかせるために、児童の考えを繋ぎながら関わりあうこと、子どもの見方・考え方を基に課題を生み出すために問い返すこと、疑問を深めたり一人ひとりの見方や考え方を明確にするためにゆさぶることなど、教師の関わり方を工夫することで、一問一答ではなく、子ども同士の対話を促したり、教師と子どもの対話を促したりするような関わりあいとなるよう工夫した。

次に、対話的な学びを引き出すために ICT 活用の工夫を行った。3 年生の国語の実践では、詩の題材の中心となるものから言葉を連想し、それらの分類を通して詩を創作する活動を行った。自らの思考を整理する切り口として、シンキングツールを使いながら、言葉の吟味をすることができた。また、全体で共有する中で、ものの見方や考え方を働かせながら言葉の持つ五感を捉えることができた。さらに、自然と子どもたちが言葉に併せて動作化を行うことにより、言葉の持つイメージを他者と交流したり、自らの言葉で再構築する場面もあった。

他にも、1 年生の国語科の実践では、文章を読み、理解していく手段として Meta Moji（メタモジ）を活用した。4 年生算数の面積の実践では、複合図形の面積をどのように求めるかを考える際に、Meta Moji を使って考えさせ、操作しながら説明をするなど視覚的な表現ツールとして活用した。

最後に、6 年生の総合的な学習の時間では、表現する活動の一環としてプログラミングソフト（スクラッチ）を導入した。単元のゴールとして、表現方法を選択し、グループで話し合う中で、多面的・客観的に PR の内容やプログラムの方法を考えた。また、PR カードでは、Meta Moji などを使用し、PR 内容について情報を精査したり、整理する取組も行った。情報を整理・分析するために、ロイロノートに情報を蓄積させ、シンキングツールなどを活用して情報の整理・収集を行わせた。このように授業においてだけでなく、休校中の学習指導など ICT を活用しながら様々な活動に取り組んできた。これから、1 人 1 台の環境になるにあたり、さらに他の先生と情報共有しながら、チャレンジしていきたい。

◎意見交換

■弓削小

特別支援学級では、昨年度から 1 人 1 台の配備があり、先駆けて実践をしているので、その成果、子どもたちの変容を伝えたい。インプットとアウトプットというところが、子どもたちにとても効果があった。

インプットに関しては、学習障害や読み書きが難しい子に対して、今までパソコンなどで音声を流していたが、タブレットを使うことで自分が聞きたいところや読みたいところの音声を認識させ、読み上げ機能を活用して教科書の内容を理解することができた。その内容

が理解できるといろんな発言ができ、学習に主体的に取り組むことができるようになった。わからないときにカードを送る個別支援があるが、個別にカードを送ることができるので、その子に応じた支援を行うことができた。そうすることで、「わかる」が「できる」に変わっていった。

アウトプットに関しては、表現し、自分を振り返る力が育成できた。特に、音読の動画を記録することで、今までは教師が聞いて終わりだったり、自分で振り返りができなかったところが、自分で見返し、振り返ることでこうしたらよかった、こうしたいなど、タブレットを使うことで子どもたちが主体的に音読に取り組むことができた。文字を書くことに時間を要する子もいるが、手書きや音声入力を活用するなど表現する方法としてタブレットを活用することができた。できないができるに変わったことで、子どもたちが自信を持って、学習に参加できる姿が見られた。タブレットを活用することで、その子に応じた支援をすることができる。

■帯山西小

とてもいいと思っているタブレットの使い方は、子どもたちが個別に学習を進める力を伸ばすことができること。子どもの選択肢の一つとして、タブレットを使って、いろんな表現方法や考えができる。1 人 1 台になると、学校から借りて、旅行先で興味のあるものをまとめたり、いろんな地域との繋がりなどができるようになるかもしれないので楽しみにしている。

今後、使いたいアプリや教材が出てくると思う。ロイロノートや Meta Moji はありがたい。算数忍者というアプリを使いたい子どもがいるときに、学校の判断で使用してもいいのか知りたい。

■城南小

前任校がタブレット端末先行導入校のため、他校より早く活用していたが、そのときはどんどん使わせないと、という気持ちが強く、それが逆に、タブレットを使うための活動になっていた。そうすると、教科の狙いから外れ、タブレットを使うことが目的になってしまい、ICT 活用の本質を見失ってしまう。今は、タブレットを使うための活動を考えるのではなく、学習活動の中でタブレットが子どもたちにとって文房具の一つのような道具として活用されるように、職員全体で共有し、意識して取り組んでいる。今年度からさらに活用の頻度も増えており、使いたくても使えないという状況がかなり増えてきた。そのため、1 人 1 台の環境はとても助かる。1 人 1 台になることで、書くのが苦手だから写真に残そうとか、逆に、ロイロノートで書くのが苦手だからノートに書くなど、子どもが選択できるようになるのがいいと思うし、一人ひとりが使い方を選べるのがいい。そうなるためには、子どもたちがいろんな使い方を経験しておかないと選択ができないので、教師側が研修や校内でのアイデア共有、他校の先生から学んだりするなど、自分たちが使い方をしっかり学んでいく

ことが、子どもたちの選択肢の広がりに繋がっていくと思う。

■銭塘小

天明中校区の 4 つの小学校で、外国語専科として英語の授業を行っている。小小連携・小中連携として取り組んでいるのが、タブレットを使った友達との交流である。他校の友達とは、その学校に出かけないと関われないが、タブレットを使えば移動せずに交流できる。今取り組んでいるのが、英語の時間に発表した内容を録画し、別の小学校で見せることであり、2 学期以降はオンラインでの取組を考えている。先生や ALT の先生に話してもらうことが多いが、子どもは「先生だからできる」で終わってしまう。同学年の子がこんなにできると感じることで、小小連携の繋ぎとして役立っている。中学校に繋げていって、中学校の先輩に英語で質問するなど、外国語の時間を通して繋いでいくと、中一ギャップの解消にも繋がり、進学に対する不安も軽減されるのでは、と思い取組を進めている。

■東野中

タブレット端末先行導入校であり、新型コロナウイルスによる休校の事態でもいち早く対応できたと思っている。保護者の手応えとして、休校中でも授業を進めることができたという安心感にも繋がっていると感じた。できれば、私としては、子どもたちと会って、タブレットを活用していきたいと思うが、今、一番課題に思っているのは私自身のスキルアップ。あなたは本、あなたはタブレットで調べるというように、子どもたちが学びの方法を選択できる一つのツールとして活用しきれていない。

中学校としては、情報モラル教育の充実が特に大事になってくると考えている。タブレット端末の操作に詳しくなっていくことで、モラルを逸脱する可能性があるので、情報モラル教育を並行して実施していく必要がある。

■大江小

先程実践発表があったが、学習を支えるツールとしてだけでなく、新型コロナウイルスで休校したときにおいても、zoom でみんなと繋がることができたというのは大きい。熊本市だからこそできたことであり、学校に来たときにも、友達などと今までどおり話すことができたと思う。

1 人 1 台になる課題としては、今はうれしいからちゃんと使っているが、飽きがどんどん来るので、子どもたち自身に考えさせるための課題設定や授業をさらに実施していかなければならない。また、書くのが苦手だから写真でというのも円滑に進めるツールだが、書けないから書かなくていい、とならないように、苦手な分野の取組も取入れながらバランスを考える必要がある。

■富合中

休校中に zoom による健康観察を行うことで、生徒全員の様子や体調観察を行うことができた。教師だけでなく、子どもたちもうれしかったようだ。学習したいが学校に行けない生徒は、zoom を通して、先生との教育相談や養護教諭との面談、スクールソーシャルワーカー・スクールカウンセラーのカウンセリングを受けることができ、学校に来ることが出来ない子どもとコミュニケーションを図る機会にもなりとても助かった。

■飽田東小

課題としては、今の台数ではいつでも使えない、使いたいが別の場所に取りに行かなければならない、取りに行く時間がないなど、なかなか使えない状況があった。これからは、タブレット端末が 1 人 1 台となることで、子どもたちの可能性が大きく広がるのではないかと思う。

ICT を使ってよかったこととして、休校中にも子どもたちと zoom でつながれたことがある。また、ICT を導入することで、職員室の雰囲気が明るくなり、ベテランと若手が連携して授業改善を行うなど、ヘルプを出せる職員室を、現在、目指している。ICT の活用は、これから子どもたちといっしょに考えるうえでとても大事なことだと思っている。写真やデータのやり取りをスムーズに行うために、学校に Mac を導入できないかという要望が職員間であった。

■楠小

タブレットの導入により教員も子どもたちも選択肢が広がり、自身としても指導観・授業観が変わった。導入時に初めてタブレットを使ったが、選択肢の広がりを実感し、授業づくりが楽しくなった。子どもたちも楽しく取り組んでくれていると感じている。要望としては、授業づくりに集中できる環境がほしい。本来、私たちは子どもたちに学びを与えることが仕事であり、授業づくりについて考える時間が十分にとれないのが実状である。現在、情報システムが e ネット・c ネット・タブレットと別れているので、システムを一本化していくことで、教師も選択肢が広がり、働き方改革に繋がり、本来の仕事に力を注ぐことができるのではないかと思う。

■桜木小

これから 1 人 1 台のタブレット端末が配備され、教員のスキルアップが必要になる。限られた時間の中で授業づくりを行ううえで、情報の共有化を充実させてほしい。例えば、teams のように全校が繋がっている所にファイル保存ができる、ロイロノートや Meta Moji などで作成したデータを、同じ学校間だけでなく、学校を超えて共有ができる、などのシステムがあれば、自分でもやってみようという気持ちになるのではと思う。1 人 1 台の環境に

なり、アプリや児童用のデジタル教科書が充実してくると、その活用の幅が広がるので、検討を要望したい。

■市長

タブレットを導入してよかったという先生が多かったが、急激に導入したので戸惑っているのかと思っていた。ポジティブな話が多かったが、逆にネガティブな反応があったのではと思っており、その点について、ハードルや壁があるという話を聞きたい。

■弓削小

先生の話を聞く中で、タブレットは使うが、実物の鉛筆を持って書くことも大事にしなければならず、特に発達段階の低学年からタブレットを使っていいのか、という話があった。使いすぎによる視力低下など、健康面と学習面の活用とのバランスをいかに取るかが課題になる。

■東野中

去年の赴任当時は、職員は抵抗感があったように思う。自分も使い方が分からず、未知の世界への抵抗感があり、また、年齢による受け入れの差もあった。管理職や研究部の先生を中心に、とにかく研修することで、何とか使えるようになったと感じている。

■市長

抵抗感があった先生が、どのくらいで抵抗感が薄まってきたか、まだ抵抗感がある先生もいるのかを教えてほしい。

■東野中

昨年度は抵抗があったと思うが、新型コロナウイルスの影響があるかもしれないが、必要に迫られて意識が変わったのではないかと思う。

■市長

抵抗感があったかと思うが、必要に迫られていく中で、オンラインで授業を行うことは、今は普通になってきている。そういう環境にも人間は対応していくことができると思っている。手段としての教育 ICT なので、主体的に学び、伝えたいことを表現できるタブレットが有効であること、これはどの学校でも同じようにしていけると思う。最初は時間がかかると思っていたとの話もあったが、個別に学習する力がだんだんついてくるようになっていった。学校で使いたいアプリや教材を入れる件については、教育長に確認したい。

■教育長

本市のタブレットは自由に使えることを重視してこれまで整備してきているので、日本の公立学校では一番自由である。アプリを有料と無料のものに分けて、無料のものは教育センターに申請、確認を行いインストールすることができる。許可されたアプリであれば、どの先生も自由に使えるようになっている。タブレット導入時にそういう仕組みにしようと決めた。

■市長

Mac の導入については、タブレットを使って授業をする際に便利ということであれば、担当部署に導入可否について確認したい。市の幹部会議は全部タブレットで行っており、私のところに紙を持ってくる人はいなくなった。見て判断するという意味では、管理職・幹部の意思決定としてはいいのかもしれないが、現場ではこういうデバイスを選択してはどうかと話をしている。先生からも言えるような環境に変わっており、そういう要望を挙げてもらった方がいいので、どんどん言っていただきたい。

e ネット・c ネットなどあるが、ポータルサイトなどは市長室に行かないと見れない。情報システムを一本化していこう、行政システムのデジタルトランスフォーメーションをやろうと、総務局を中心に行っているところである。学校には複数のシステムがあるため、そこに時間を取られると授業づくりの時間がなくなってしまうので、シンプルにしていきたい。いいものを導入していくことで効率化がかなり図られるので、セキュリティの問題もあるかと思うが、そういう環境を作っていきたい。

■銭塘小

タブレットが入って衝撃的だったのが、最近スマートフォンに変えたような再任用の先生に、初任の先生がタブレットの使い方を教えるという光景があった。初任の先生は物心がついたときにはタブレットなどを使う環境があったと思う。再任用の先生も一人でタブレットを使って教材研究をしている。その先生は、自分一人ではできず、若い先生のサポートがなければできなかったと言っていた。若い先生も担任をもっているので、自分のクラスで精いっぱいということになる。これから、ぜひ先生のマンパワーを増やしてほしい。自分のように専科であったり、担任ではない先生を増やすことで、研修の時間を確保できるのではないかと思う。スクールサポートスタッフや指導員など非常にありがたいが、物はかなり揃っていると思うので、ぜひマンパワーの充実をお願いしたい。

■楠小

楠小でこれだけタブレット活用が広がったのは、情報担当の先生がとても優秀であり、機器の活用はもちろん、情報に詳しいだけでなく、授業のことも知っていて、他の学年も満遍なく見ていただいたため。そういう先生がいると、とても相談しやすいし、他の先生の情報

も得られやすい。一人でも詳しい先生がいたり、他も見ている先生がいると、もっと可能性が広がるのではないかと思う。担任は自分のクラスだけで一生懸命になってしまう。別の立場の情報とか機器とか授業についても知っている人がいるというのが本校では大きい。やはりマンパワーが重要だと思う。

■市長

マンパワーの問題があると思う。文部科学省とも話をしたが、今から国にどんどん要望してほしいとのことだった。こうゆうツールがあると、もっと大人数でできたり、少人数のグループでするなど、かなりいろんな選択ができるので、マンパワーの充実もしっかりやっていきたい。

■弓削小

学校に来ることに抵抗がある子ども、家からでも授業に参加できるなどの、学習の場所への配慮ができればと思う。

■市長

不登校などの学校に来られない子どもに対し、今よりもっとこうした方がいいということはあるのか。

■弓削小

学級の様子が見られる、子どもに話しかけたりできる設備あればいい。1 人 1 台プラス 1 のように繋がっていられる道具が必要かなと思う。

■市長

コミュニケーションをとるためのもう 1 台ということ。

■教育長

今度の補正予算で、各教室に 1 台ずつ授業配信ウェブカメラ導入経費の予算要求をしている。今は、ご自身のパソコンなどを使っているかと思うが、学校のパソコンでできるようにウェブカメラを各教室に 1 台ずつ入れる予定。

■市長

要望を言っていただければと思う。市は今まで ICT の機器の導入についてはワースト 1、2 レベルからかなり整備と活用が進み、英語の発表を子どもたちがレコーディングし、他の子どもに見せる。こんな使い方をしているのかと新たな展開に繋がる。導入することが目的ではなく、導入した後に新規の活用をどれだけ思いついたか、新たなアプリを入れるなど、

ポジティブに回っていくようないい活用をする。そして、必ずしもポジティブだけでなく、読み書きの部分で言えば、書くのが苦手だからとか逃げる道具にＩＣＴを使わない、この部分は非常に重要と話を聞いて思った。先生がもっと楽しく活用できるよう、私もがんばるし、国にも予算の要望はしてきている。タブレットを霞が関に持っていき、2 分だけ時間をもらって、財務省・文部科学省の事務次官や国会議員にも見てもらった。熊本市だけが先行するのではなく、日本全国が同じ環境でなければだめだと思う。今、人吉や天草から来た先生から、なぜこんな格差ができているのかと言われないように、県全体としても、日本全体としても同じような整備ができるように、一人の政治家として市長会等にも伝えていきたい。教育センターの近くには熊本城があり、熊本には偉人がたくさんいるが、学校で歴史やルーツなど地域ならではのことを ICT ツールを使って教えていただく、例えば、身近な素材をいかに使って、それをプレゼンする力、アメリカのシカゴの小学校に動画で送ることだってできる。そういう表現力をつけてもらえるようなことを学校で実践してほしい。

■教育長

要望があったら、できるだけ対応していくので、どんどん言っていただきたい。

■市長

教育長もいろんな話を聞いてくれるし、教育センターにもすばらしい職員がいる。熊本から教育を変えていく、そのくらいの意気込みでがんばっていきましょう。本日はありがとうございました。